

横断歩道部の歩車道境界の評価実験方法

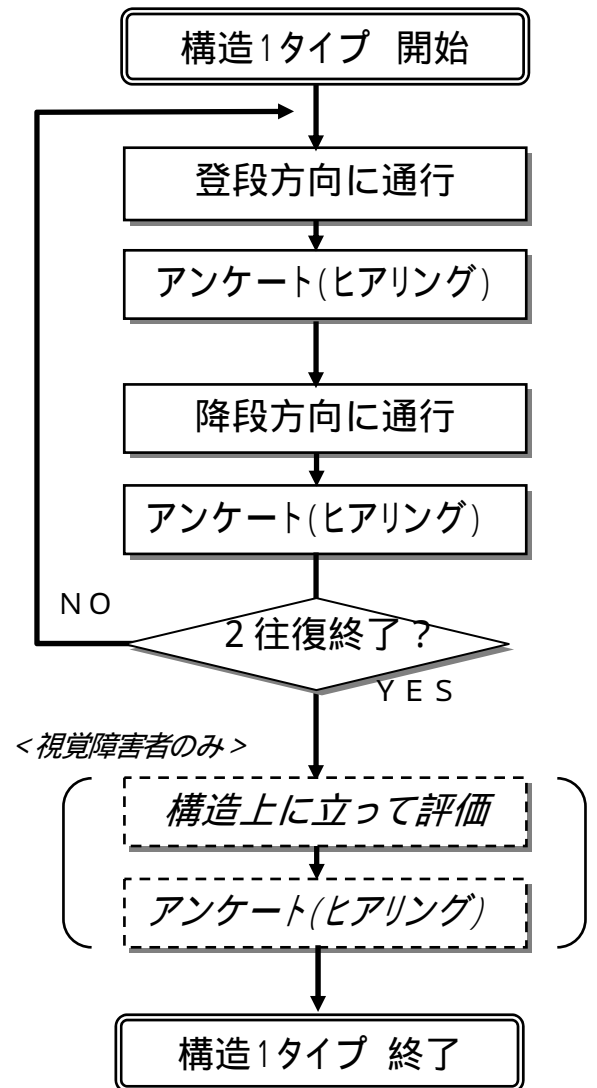
1. 1つの構造タイプの通行・評価の流れ

【各被験者共通】

- ・登段方向・降段方向に2往復
- ・通行後にアンケート(ヒアリング)を実施(1タイプにつき、登段方向・降段方向に各2回、計4回実施)。

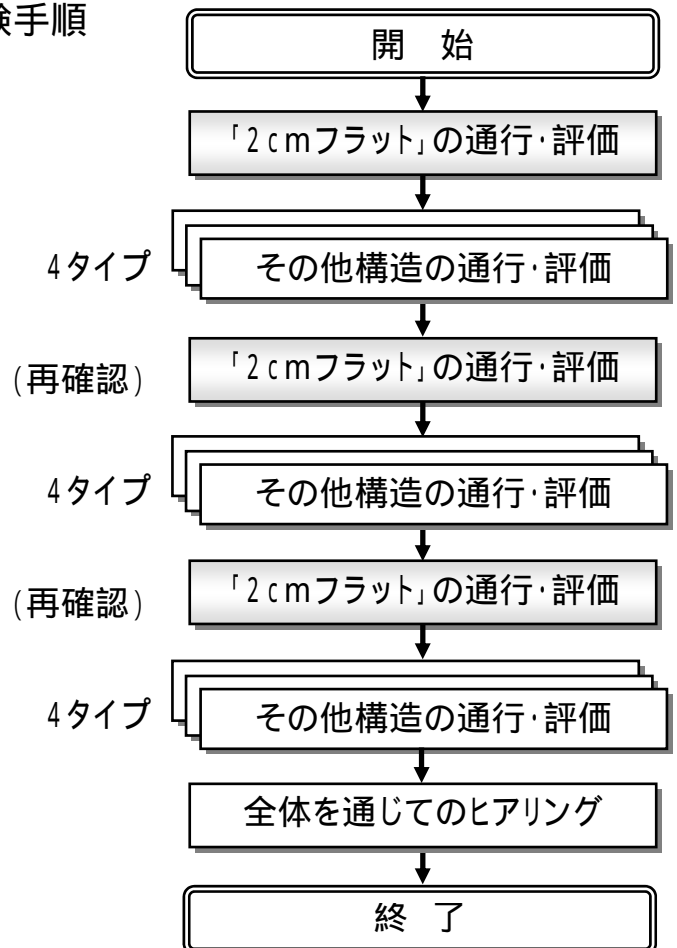
【視覚障害者のみ】

- ・縁端構造上を通行する際、境界部を認識できた合図として、認識できた時点で挙手してもらう。
- ・歩車道境界の位置が想定されないように、スタート位置を各構造ごとに变化させる。
- ・登段・降段方向の2往復後に、縁端構造上に立ってもらい、足で踏む、触るなどして評価(アンケートも実施)。



## 2. 1.2 構造タイプ及び基本構造の実験手順

- ・基準構造「2cmフラット」とその他の構造タイプについて、右図のとおり通行評価を繰り返す。
- ・その他 12 タイプの順序(ローテーション)については、構造の条件が規則的にならないようランダムとする。



## 3. アンケート内容

車いす使用者 (杖使用者含む)

Q1: 「一般タイプ(2cmフラット)」と比べた場合の「通行のしやすさ」

Q2: Q1の回答を選んだ理由(通行しにくい要因/通行しやすい要因)

Q3: 「一般タイプ(2cmフラット)」と比べた場合の「身体の疲れ」

Q4: Q3の回答を選んだ理由(疲れる要因/疲れしない要因)

Q5: 「一般タイプ(2cmフラット)」と比べた場合の「衝撃による苦痛」

Q6: Q5の回答を選んだ理由(苦痛を感じる要因/感じない要因)

Q7: その他の「一般タイプ(2cmフラット)」との違い(自由回答)

視覚障害者

Q1: 「一般タイプ(2cmフラット)」と比べた場合の「わかりやすさ」

Q2: Q1の回答を選んだ理由(わかりにくい要因/わかりやすい要因)

Q3: 「一般タイプ(2cmフラット)」と比べた場合の「気疲れ、不安感」

Q4: Q3の回答を選んだ理由(気疲れ、不安感を感じる要因/感じない要因)

Q5: 普段と同じような歩き方の場合の「歩車道境界を識別できない可能性」(今回は偶然足や杖が当たって識別、タイミングによっては識別できないなど)

Q6: その他の「一般タイプ(2cmフラット)」との違い(自由回答)